

三谷 孝著

『現代中国秘密結社研究』

汲古書院 二〇一三・一二刊

A5 四二〇頁 一一〇〇〇円

本書は、三谷孝氏が生前進めた現代中国社会の秘密結社を中心とする民衆運動に関する論考に、一九三〇年代の陳翰笙ら「中国農村派」に関する論考を加えて編集したものである。六つのグループからなる、全一四章から構成されている。

第一グループ「秘密結社研究の概要と課題」。第一章「現代中国秘密結社研究の課題」では、紅槍会をはじめとする蜂起や労働者運動の発生と展開のメカニズム、革命と伝統の相克や共存関係が紹介されている。第二章「戦前期日本の中国秘密結社についての調査」は、平山周などの見聞や分析から興亜院・軍部・満鉄調査部などの機関による調査を鳥瞰したものである。

第二グループ「紅槍会研究」。第三章「国民革命時期の北方農民暴動」と第四章「国民革命期における中国共産党と紅槍会」は、かつての民衆運動研究にみられた先進と後進とに二分する運動評価を、新聞雑誌の分析を通して批判したものである。第五章「紅槍会と鄉村社会」は、紅槍会型組織の特徴は内外との複雑な関係から解釈できると説明している。

第三グループ「迷信打破運動」研究」。第六章「南京政権と「迷信打破運動」(一九二六～一九二九)」は、南京中央官僚と地方社会と

の対抗関係を党・政府の角度から検討し、社会変革の多様性を考察したものである。第七章「江北民衆暴動(一九二九年)について」と第八章「大刀会と国民党改組派」は、それぞれ江蘇省北部の小刀会と南京近郊の大刀会を取り上げ、「迷信打破運動」の背景にある社会問題を解説している。

第四グループ「秘密結社と政治勢力との関係」。第九章「伝統的農民闘争の新展開」は、国民党と共産党による民衆運動に対する指導という観点から、天門会を取り上げて検討したものである。第一〇章「天門会再考」と第十一章「天門会発祥の地を訪ねて」は、作者が一九八八年と一九九三年の二回にわたって河南省農村でおこなったインタビュー記録をもとに、民間結社発祥の背景を考察している。

第五グループ「中国農村」派研究」。第十二章「中国農村経済研究会とその調査」と第十三章「抗日戦争中の『中国農村』派について」は、一九三〇年代の陳翰笙を中心とする農村調査について検討したものであり、農村変革の工作、抗戦前の農村社会論の変容などが考察されている。

第六グループ「中国内陸部における一貫道の実態」。第十四章「反革命鎮圧運動と一貫道」は、一九三〇年代から一九五〇年代まで山西省長治市の一貫道を事例に、中華人民共和国成立直後の一貫道に対する取り締まりとそれに対する抵抗の実態を明らかにする。本書最大の特徴は、民衆運動の研究をかつての「人民闘争史」の段階から中国社会史研究の段階へと推し進めた点である。また、中国歴史研究における重要な研究方法としてフィールドワークを

重視すべきだとの指摘がなされている。関連分野の研究者にとって多くの示唆に富む良著である。

(馬海龍)